



TITLE:

きらめく動物たちの命と海:久保田
信の白浜だより(その13)

AUTHOR(S):

久保田, 信

CITATION:

久保田, 信. きらめく動物たちの命と海:久保田信の白浜だより(その13). うみひろ 2011, 87: 15-17

ISSUE DATE:

2011-10-16

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/180235>

RIGHT:

© 海の生き物を守る会

4. きらめく動物たちの命と海 【久保田信の白浜だより(その13)】

カワウの休憩所

毎年、冬季になると、春先まで続くのだが、白浜町の瀬戸漁港と瀬戸臨海実験所との間にある鉛山湾の特定の小さな岩礁にカワウがやってくる。もう何年も継続して観察している。勿論、長さ 10m、幅数 m ほどの小さな岩なので、大時化でザブンと海水が岩礁を乗り越えて洗う時や、潮がよく干いて人が渡れるようになった時に姿はない。通常、孤立状態で人が近寄れないため、安心して羽休めできる休憩所選ばれているようだ。瀬戸漁港での観察へ向かう途中、1日1回は、カワウがきているのか調べ続けてきた。

その結果は、カワウはそこに長時間とどまらず、1日の一時的な休憩所として使って

いるだけなのだ。どこかで餌をいっぱい食べた後で移動中か、これからの活動に備え英気を養っているようだ。小さな面積しかない岩礁なので、収容できるカワウは限られている。最多でも 20 羽を超えることはない。通常、数羽のことが多く、まだ胸に白が混じった幼鳥や、繁殖期を迎えて多少色変わりしている成鳥も交じっている。鳥をサルのように顔で区別することはできないので、正確なことは不明だが、いくつかの家族が決まってやっているのではないだろうか。

カワウの生活史

この岩礁にくるカワウたちの一生はどうなっているのだろうか。「ねぐらはどこなのか」、「1 日、どこを巡るのか」、「季節を通して、どこへ移動しているのか」、「餌は何をどこでどれだけ食べているのか」などの様々な疑問が出てくる。

カワウは 40 種ほどいるウの仲間でもっとも内陸まで進出した種で、羽を広げると 1 m にも達する大形種である。水中での活動に適するように、形態的適応が色々な形質で見られる。眼中の水晶体は、水中で変形させられるので、餌までの距離が正確に測れ、目を保護する膜もある。長い首も餌を捕らえる時に自在に伸縮できるので、的確に捕獲が可能となる。さらに、嘴が鋭く先端がかぎ型なので、餌の確実なキャッチができる。後足の 4 指の間には水かきがはられ、遊泳が敏速で餌捕りを確実にする。

餌は主に魚で、頭の方から丸のみする。瀬戸漁港では海中をすいすいと潜るカワウの姿を見掛けるが、餌を捕獲した瞬間は見たことがない。羽を傷めたカワウが 1 羽、瀬戸漁港にしばらくいたため、大丈夫か毎日見守っていた。そっと驚かさないように観察していても、近付くと大慌てで海に飛び込んで逃げていったが、いつの間にかいなくなった。

カワウは、巣を安全な木の上などで、集団で作る。産んだ 3～5 個の卵は、約 1 カ月後に孵化する。孵化後 40～50 日経つと、ヒナは巣立ちするが、その数は、平均 2 羽といわれている。両親と同数なので、厳しい自然の中で、種は絶え間なく生存し続けられるのだろうか。

京大瀬戸臨海実験所の北浜へ降り立った多数のカワウ

これまで北浜の砂浜にカワウがやって来たことは一度もなかった。砂浜はすこぶる苦手なのだろう。ところが、2005 年 1 月 24 日にこれまで見たこともないほどの数のカワウがやって来た。船着き場の西側の砂浜に約 100 羽が羽を休めていた。シュノーケリングで 1 周する第 1 岩礁に 50 羽、第 2 岩礁に 15 羽、船着き場に 10 羽いた。この辺りでしばしの休

みをとったのだろうが、岩礁が埋め尽くされたので、泣く泣く砂浜に大勢のあぶれ鳥が来たのかもしれない。この珍しい写真を撮ろうとゆっくり近付いたのに、敏感な彼らにすぐに気づかれ、一斉に飛び立たれてしまったがその瞬間のショットをなんとか収められた。全体で 200 羽に近い数の一斉の飛び立ちは壮観だった。

北浜に下りると、いたところは糞だらけ。カワウは肉食性なのでちょっと臭い。ひとつずつの糞は、どれも綺麗な線を数本引いたように付けられていた。糞をする時の軌跡だろう。1 個の糞の量は多くはないが、ねぐらや決まった休み場は、多数の個体がいるのなら白っぽくなって、臭くて大変だ。時折、鉛山湾の岩礁も一部が白くなっている。そこに何度もとまったり飛び立ったりを繰り返す間に、糞がたまるからだ。

ウミウと人間の生活の共存

ウといえば伝統的な鵜飼が有名だ。カワウ以外にも近縁種であるウミウも同様に利用されている。だが、天然のウたちは魚食なので、人間に困った問題を引き起こすこともある。白浜町や田辺市周辺や紀南地方の河口ではカワウが集団で、遡上する若アユを食べるので、漁協と摩擦があるようだ。河川や河口の改修などで、一時は個体数が激減したカワウだが、色々な魚の養殖や放流などで、美味しく手軽に頂ける餌が増えたのと並行し、その数も増えてきたという。その結果、人間との摩擦が生じる。環境を悪くしてカワウの数を減らし、人工増殖した魚で数を戻す。これでおあいこかと思いきや、よく言う「いたちごっこ」である。お互いの共存を踏まえ、自然保護を考えないと、数の多いカワウもトキのように絶滅してしまう可能性がある。



図. 北浜の岩礁に舞い降りた繁殖期のカワウ（2 箇所が白くなっている）